

# 社会福祉法人 **カリオン子どもセンター**

大丈夫。一緒に考えよう。あなたは大切な人。

News Carillon No.6(20)

## 子どもシェルターに安定した経済基盤を！

理事長 弁護士 坪井 節子

カリオン子どもセンターは、NPO法人として船出をしてから、通算7年目に入りました。今年に入り、シェルター利用を必要とする子どもの数が、急に増えてきたと感じています。悲しいことに、カリオン子どもの家ガールズも、ボーイズも、満員で入居を断らなければならない事態が、何度も生じているのです。

ひとつには、シェルターの存在が周知されるようになり、これまで家庭や地域の中でひどい目にあっていても、諦めるしかなかった十代後半の子どもたちが、助けを求めるようになったということがあると思います。しかしもうひとつには、子どもを育み守る力を失う家族が、急速に増えているという理由もあるのではないかと思います。

長引く不況、貧困、希望の見えない社会の中で、大人たちが生きる気力を失い、関係を分断され、孤立し、心身の健やかさが保てなくなっている。子どもに関心を払い、大切にするという余裕がなくなっていると感じます。

多額の借金を作り、父親が失踪し、押し寄せる債権者に痛めつけられてきた子ども。母の交際相

手に暴力を振るわれ、脅され、アルバイト代を巻き上げられてきた子ども。長い間養護施設で育ち、突然母親が現れて引き取られ、1ヶ月もたたないうちに追い出され、路頭に迷った子ども。母のいない家庭で、酒乱の父親の暴力に耐え、妹をかばいながら生活し、あと半年で高校を卒業するときに、警察に助けを求めて逃げてきた子ども。寂しさのあまり出会い系サイトで知り合った男に、散々痛めつけられ、売春をさせられてきた子ども。少年鑑別所で更生を決意し、社会復帰の希望を持ち始めたのに、両親が過去の非行を理由に引き取りを拒否した為に、失意の底に突き落とされた子ども。

何故子どもがこれほどの受難に遭わなければならないのかと思います。しかしシェルターの現場では、その悲惨さに打ちのめされてはいられません。子どもたちは、毎日をしっかりと生きていきます。手作りの食事やお菓子里に目を輝かせ、甘えて、すねて、暴れて大人たちを困らせ、頭痛や吐き気、不眠や苛立ちを訴えて病院に連れていってもらい、話を聞いてもらって泣き、おしゃべりやテレビや音楽を楽しみ、将来への不安と希望に揺れています。

### 目次



* 子どもシェルターに安定した経済基盤を	.....	1~2
* とびらの家通信 (17)	.....	2~3
* タやけ荘便り(14)	.....	3~4
* 子どもの家とともに Part19	.....	4~5
* 子どもに家ボーイズから	.....	5~6
* もがれた翼 Part17「雨の記憶」と人権擁護大会特別公演	.....	6~7
* カリオン事務局からのご報告	.....	7~8

スタッフも弁護士も、とにかく、この子が大切にされていると感じてほしい、ひとりぼっちではないと気づいてほしい、生きていることにはうれしいこともあると知ってほしい。それを願って、うまくいかないことはたくさんあっても、一生懸命に、子どもに寄り添おうとしています。

ところが、当法人の今年度上半期の決算を見て、愕然としました。寄付の金額が必要額の半分にも届いていないのです。これまで6年間は、多くの支援者の皆様のお陰で、何とか赤字にならずに乗り越えてきました。しかし今年度は、初めて単年度赤字という結果が出るかもしれないのです。寄付に頼って運営せざるを得ない法人が、いつか必ず遭遇すべき障壁だと覚悟はしていました。これまで必要な資金が与えられてきたことが、奇跡的だったと感謝すべきなのです。とにかく下半期も資金集めのために、さらに力を尽くしていく所存であり、

新たな助けが与えられることを願っています。

事務局からの報告にあるとおり、今年の7月には、NPO 法人子どもセンターてんぼ、NPO 法人子どもセンターパオ、NPO 法人子どもシェルターモモと一緒に、厚労省への陳情を行いました。シェルターの必要性を認め、子どもの権利擁護の事業として、安定した運営がはかれるよう、補助金を交付してもらいたいという趣旨です。残念ながら、今年度の国の予算には計上されませんでした。引き続き、政府や国会への働きかけを続けます。日弁連の子どもの権利委員会でも、シェルターの制度化を求める意見書を出そうという動きがあります。

どうか皆様、シェルターを必要としているひとりでも多くの子どもが、しあわせになってくれることを願い、子どもシェルターの安定した経済基盤の維持のために、引き続き、様々な方面からのお力添えをお願いします。

## とびらの家通信(17)

とびらの家 職員 万治貴史

猛暑だった夏も遠いかなた、急に寒くなってきました。今年も残すところあと一カ月です。

現在とびらの家には4名の入居児がおり、全児就労中・寮費滞納なし！んー…素晴らしい。

とびらの家では3月より3名の方に日中ボランティアとして勤務していただいておりますが、今号ではその中のお一人佐野正子さんのご紹介をインタビュー形式でお送りしたいと思います。

Q、まずは自己紹介ととびらの家に来られた経緯をお願いします。

A、佐野正子です。カリヨンのことは理事長の坪井先生に2005年12月に人権週間行事の一環でご講演いただき知っていました。13年務めた法務省人権擁護委員を辞職して少し経った頃

に、近所に住む知人から「カリヨンのお手伝いをしてもらえる人を紹介して欲しい」との話がありました。「え！カリヨン？あの坪井先生の？」と、当時講演を聴き心動かされたことを思い出しました。

在職中は子ども専門委員をしており、子ども本人の悩み・親子関係の不調和・学校との関わり方等の対応をしておりました。常に願っていることは「すべての子どもが安心して生活できること」です。反し毎日のように報道される児童虐待などのニュースで日々悶々としておりました。そんな時にカリヨンのお話、縁を感じ何かお役にたちたいと思いお手伝いさせていただくことに決めました。

Q. とびらの家…どうでしょうか？ざっくりした質問ですが(笑)

A. ざっくりですね(笑)3月下旬に初めて訪問したときにまず建物が戸建てであることに驚きました。とびらの家は「家」でした。これまで目にした児童施設はいわゆる「施設」でしたので。

驚いたことといえば、子ども達が「よく話す」ことにも驚きました。大人・子どもに限らず「話せる」というのはとても大事なことだと思います。100%ではないにしろ安心できている証でしょうし、安心がなければその先に信頼も生まれなと思うからです。そうした会話の中から社会人としての考え方や方向性をアドバイスされているようです。職員は建物だけでなく中の雰囲気も「家」に近くなるように、子ども達がリラックスでき「話せる」環境を作ろうと努めているのだなと感心させられています。

私ごとですが二人の子育てもすでに終わり、人権侵害や人権尊重の啓発に時間を費やしてきたという多少の自負も、職員の皆さんに接する度に反省に変わります。心底から人権尊重の本物が湧き出しているような感じさえします。

また私にとってもとびらの家は特別な場所になりつつあります。職員と話すのはいい刺激になるし、たまに休日や早く帰宅した子どもと会えるのは大きな楽しみです。

Q. これからも長くお付き合いいただきたいと思っているんですが、今後やりたいことや抱負などありましたらお願いします。

A. 今後もとびらの家が子ども達にとって安心できる居場所であり続けることを願っています。自分が家事援助をすることで職員に少しでもゆとりを持ってもらい、子ども達への援助を充実させて欲しいなあと思います。

これからもよろしくお願いします。

短いですが佐野さんのご紹介でした。

さて、とびらの家からご紹介がもう一つ。

すでに各報道などでご存知の方もおられるかと思いますが、職員の佐藤弘樹が高円寺駅での人命救助の件で、このたび秋の褒章にて紅綬褒章を最年少で受章しました。

本人はニュースレターに載せなくてもと遠慮がちでしたが大変名誉なことですのでご紹介しました。

今回の表彰で佐藤は式典マナーやネクタイのしめ方等を学び成長しました。経験は人を大きくしますね。

これからさらに寒くなりますが子ども達・ボランティアスタッフ・職員共々元気にがんばります！

引き続きご支援のほど、よろしくお願いします。

## 夕やけ荘便り(14)

夕やけ荘 ボランティアスタッフ 立石 結夏

### 1 はじめに

はじめまして、夕やけ荘の元スタッフ、立石です。私は、夕やけスタッフ出身のコタン第一号(になるはず…)です。このような立場から、夕やけでのお仕事の中で感じたことをお伝えしたいと思います。

### 2 コタンお父さんとお母さんスタッフ

夕やけのスタッフは、日々子どもたちと一緒に生活し、時には小言も言い、子どものことを絶えず

見守っています。それに対してコタンの弁護士は、普段は顔を合わせることはないけれど、困ったときに必ず助けてくれる、頼もしい存在です。

あるコタンさんが先日、スタッフは母性、コタンは父性だとおっしゃっておられましたが、まさにその通りです。子どもに、「コタンの先生から電話よ」と、受話器を渡すと、「めんどくさいなー」などと言いながらも、なんだかんだいって嬉しそうにしています。まるで、単身赴任のお父さんとの久しぶりの電話

のように、最近の学校のこと、バイトのこと、彼氏のこと、子どもは自分の話を夢中でします。些細なことでもなんでも聞いてくれる、受け入れてくれる、そんなコタンお父さんを子どもたちは求めており、必要な存在であると思います。

### 3 子どもたちの憂鬱

子どもは、タヤケ荘とバイト又は学校の往復という大変狭い世界で生活しています。退屈で嫌になることもあるし、すべて投げ出したくなる時もあります。そういった時、彼女たちの問題解決方法は、例えば、男の子、おしゃれ、テレビ・・・などとも限定的で、上手くいかないことが多いようです。コタンになったら、子どもたちに、世界の広さ、面白さ、可能性にあふれていることが伝えられたらと思います。上から目線がキライな彼女たちに、大人が何かを伝えるのは至難の業なのですが・・・

また、子どもは、タヤケ荘で生活しているだけでは、タヤケ荘を支えている弁護士、職員、ボランティアスタッフの方がこんなに大勢いらっしゃるのになかなかわかりません。「多くの人が私のことを知っていて、そして見守ってくれている、支えてもらっているんだ」という気持ちが生まれれば、彼女たち

のよりどころとなり厭世のダムを防波堤となるのではないのでしょうか。

### 4 おわりに

私はタヤケ荘で7人の子どもたちと出会い、彼女たちが必死で生きている姿を見て、むしろ私が教えられました。さらに、タヤケ荘のスタッフの気配り目配りの細やかさに、本当に勉強させて頂きました。必ずや、近い将来コタンとして還していかなければ！と思う今日この頃であります。

コタン:子ども担当弁護士(編集部注)

追記・・・立石・元スタッフはユニークな経歴、そしてユニークなキャラクターの中、子ども達に全身全霊で対応してくれたスタッフの一人です。

常勤スタッフが体調を崩し、ローテーションが厳しい状況の時など“スーパーウーマン”のような頼もしい存在でした。

今回、司法試験に見事合格し、修習の時期に入る為、タヤケ荘を去ることになりましたが是非、立石さんの目線に立って書いて欲しいと思い、修習準備のお忙しい中、原稿を寄せて頂きました。

(ホーム長:川上 寿世)

## 子どもの家とともに Part19

子どもの家(Girls) 職員 川村 汐子

初めまして。今年6月より子どもの家(Girls)の職員となりました川村です。

かれこれ30年も前に養護教諭をしていましたが、結婚のため埼玉に来て、長い専業主婦の後、お年寄りの社会福祉施設ケアハウスで10年間スタッフとして勤務しておりました。

そのような流れの中で、50歳をすぎ、子どもたちも手がからなくなってきた時、ふっと「もう一度子どもに関わる仕事がしたい。」と思うようになりました。

それが2年前の大学への編入となり、恩師との出会いがあり「カリヨン子どもセンター」へとつながって頂いたのです。

「カリヨン子どもセンター」のお話を頂いた時、2年程前だったか教育テレビに理事長が出演されていたことを思い出しました。その時は「こういう世界もあるんだ・・・」という印象だったのですが、まさかこのような形で自分が関わることになるうとは夢にも思いませんでした。

しかし、自分の子どもでさえも自立させることの

難しさを未だに感じているのに、こんな自分で務まるのかと思いましたが「起こることは全て意味がある」と考えると今の自分の成長に必要であり、このご縁をありがたく思いました。

今年は虐待の通報件数が激増し過去の1.7倍(昨年比)になるとの報告もあるようですが、子どもの家においても入居打診が続き、定員4名のところ現在満室状態となっております。

ガールズの子供達達の一番の楽しみは、ボランティアスタッフとのお菓子作りやパン作りです。

時には、気分転換のためカリヨンハウスで、カラオケやボイストレーニング、鍼・灸、料理などをしながらストレス発散したり、シェルター以外の大人に対し普段話せないことも話したりして、それぞれが有意義な時間を過ごせるよう工夫しています。

未だ、数か月ではありますが、ガールズに辿り着いた子供達と生活するようになり、そうした中で「私にできることは何か…」と考えましたが、日々の生活の中で職員としてやらなければならないこ

とを誠実にこなしつつ「自分の歩幅で、自分なりに…」というシンプルな考えに落ち着いてきました。その間たくさんのスタッフさんや職員の皆さんが私と真剣に向き合い、いろいろアドバイスして下さる様子からこうしたことが子どもと向き合うことにも共通すると気づかせて頂いたのです。

そして理事長からは「子どもの生活は、生活も共にして苦楽を共にするスタッフが支えている。専門家の意見は必要だけれど、それが常に正しいということでもなく、常に役立つということでもない。何より大切なのは子どもと向き合うスタッフが子どもと悪戦苦闘することにより、失敗や挫折を体験し、謙虚になり続けながら子どもに寄り添うことを実感し、体得していくこと。」とお話頂きました。

今の私は職員としても未熟で何かを語るようなものもありませんが、今回このような場を頂いたことで、もう一度自分と向き合い、精進していくチャンスにしたいと思います。

皆様の御指導宜しく御願い致します。

## 子どもの家ボーイズから

子どもの家ボーイズ ボランティアスタッフ 中塚 淳

皆さん、はじめまして子どもの家ボーイズ、ボランティアスタッフの中塚です。

私は、小学校、中学校といじめを受けた経験があります。今思い返しても、まるでなにも光のない洞窟にいるような、そんな思いで生きていました。家族には相談できない、楽しく学校に行っていると思っているから、先生も、大人も信用できない、どうせ助けてくれやしない。そう、ずっと思っていました。

しかし、そんな中でも目を逸らさずに助けてくれる人もいました。黙って抱き締めてくれる人、一緒に戦ってくれる人、色んな人たちに助けられ、今の私がいます。きっと、いつかは私も誰かを助けよ

う、そんな人間になろうと思っていました。

そして大学に入学し、一年時のゼミの担当講師であった前田信一先生(カリヨン子どもセンターの理事)に出会い、カリヨン子どもセンターの話聞き、もうここしかない! そんな思いで前田先生にご相談し、ボランティアスタッフとして働かせていただくことができました。

実際に現場に入ってみると、子どもたちの過去に正直、戸惑いました。親からの虐待や周囲から見捨てられてきた子どもたち。最初は腫れものに触るような対応しかできなかったと思います。ボーイズに入居直後の子どもたちはぎこちない笑顔を

浮かべることが多かったように思えます。安全は場所には逃げられた、けれど周りは知らない人ばかり、これからどうなるんだろう・・・、と不安でいっぱいだったと思います。私も不安でいっぱいでした。

けれど、少しずつ、時間をかけて接するうちに、「あれ？」と思うことが多くなってきました。子どもの笑顔が少しだけ軟らかくなってきたと思うことが多くなりました。小さな変化かもしれませんが、しかし、折れかけていた私の心をまっすぐにするには充分でした。子どもたちがここに居ることが出来る時間はそう長くはありません。また、社会に立ち向かって行けるようにここで元気を補充して行けるよう、また元気をあげられるよう頑張っていきたいと思っています。

カリヨンに入ってから三人の子どもを見送ってき

ました。

未だに定まらない私の立ち位置に思い悩みつつ、必死に距離感を探ってきました。子どもたちの年齢は十代後半で自分とそう変りの無い子どもたちです。「職員ポジション？いやいや、入ったばかりでそんな・・・けど友達感覚では・・・」正直、未だに定まりません。スタッフの皆さんからは「お兄ちゃん的な感じでいいんじゃない？」と助言をいただきまして、「お兄ちゃんか・・・」とそんなことでも悩んでいます。

もうすぐ、カリヨンでの生活は半年を越えようとしています。まだ、出来ることが少ない半人前の私ですが、スタッフの皆に手を引かれ、はたまた子どもたちにも手を引かれ、なんやかんやで頑張っています。いつかは立派なお兄ちゃんになれるよう、夢見て今日も頑張っていきたいと思っています。

## もがれた翼 Part17「雨の記憶」と 人権擁護大会特別公演「しあわせになりたい」

子ども担当弁護士 佐藤 香代

カリヨン子どもセンター誕生のきっかけとなった、東京弁護士会主催、子どもたちと弁護士が作るお芝居「もがれた翼」の上演活動も、今年で17年目を迎えます。今年、本公演として「パート17『雨の記憶』」を、また、日本弁護士連合会主催人権擁護大会(盛岡)では特別公演として「しあわせになりたい」を上演しました。

『雨の記憶』では、性的虐待が子どもたちに与える深刻な被害を訴え、また、新しい取り組みとして「司法面接」を提案しました。物語では、小学校4年生のときから義父からの性的虐待を受けてきた高校1年生の少女・亜美が、売春をして警察に補導されたことから、付添人となる弁護士に出会います。

カリヨンにSOSを求めてやってくる現実の子どもたちの中にも、たくさんの性的虐待の被害者がいます。こうした子どもたちは、「汚された」という呪縛に傷つき、愛する家族を苦しめたくないとの思い

から誰にも相談できず、こうした苦しみの果てに自傷行為や売春などの性非行に陥ってしまうなど、深刻な傷を抱えています。性的虐待には、密室の中で行われ、目に見える外傷を伴わないゆえに、犯罪行為として加害者を処罰することに、大変な困難を強いられるという問題もあります。

作品の中では、こうした問題の解決への糸口として、「司法面接」という方法を提示しました。これは、特別な訓練を受けた面接官が、一度だけ子どもから虐待に関する事実を聞き取り、その様子を録画などで記録して、検察官や児童相談所を含む関係諸機関が共有し、刑事裁判の資料等に用いる制度で、アメリカなどでは既に導入されています。子どもたちの記憶が新鮮なうちに聞き取ることで、その証言の信用性を確保すると共に、子どもにとっても、繰り返し辛い体験を聞かれるストレスから開放されることが期待されています。

亜美は、自分を励まし支えようとする周囲の大

人たちの存在を見て、少しずつ、大人への信頼、そして、生きる希望を取り戻していきます。

フィナーレでは、900人を越す来場者の方々からの割れんばかりの拍手に、苦しい役どころ演じた子どもたちは、素晴らしい笑顔で応えたのでした。

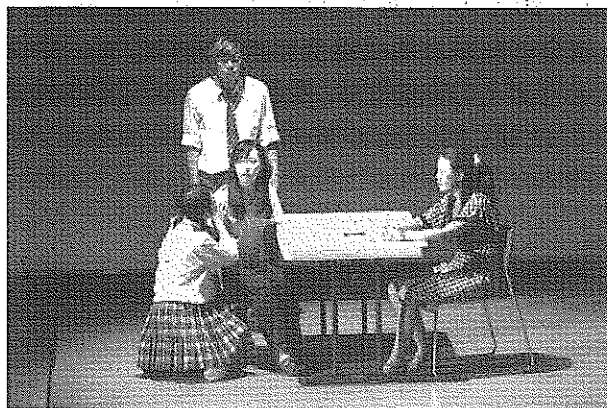
特別公演「しあわせになりたい」では、貧困家庭に育つ子どもたちが、社会の中で自立するための必要な力を身につける機会さえも奪われ、社会の中で孤立していく様子を描きました。

病気の母親とニートの兄とともに、生活保護に頼って暮らすみづきの願いは、「しあわせになりたい」。母親のようになりたくないとの一心で自立を目指したみづきは、学歴の壁や人づきあいの経験の少なさなどのために、職場でもうまく振る舞えずに苦しみ、いつしか心さえも病みます。しかし、カリヨンで出会った人々との暖かなふれあいを通して、みづきは、悩みを打ち明け、一緒にご飯を食べる

人がそばにいることこそが「しあわせ」なのだ気づくようになります——。

私たち弁護士にとっても、もがれた翼の活動は、子どもたちの苦しい現実を知り、子どもたちとともに歩いていくことを学ぶ大切な機会です。そして、もがれた翼が私たちに教えてくれたことは、現実の子どもたちへのコタン活動に反映されていきます。

もがれた翼が、これからも、広報活動の枠を超えて、私たち弁護士の道しるべとなるように、今後ともご支援、ご協力をお願い致します。



## カリヨン事務局からのご報告

事務局長 石井花梨

### (1) 2010年7月1日 厚労省への陳情

子どものシェルター活動には制度的基盤、財政的基盤が無く、安定的な運営を継続していくことは大変困難です。こうした状況をご理解くださった皆さまに物心両面でお支えいただいている状況ではありますが、シェルターが児童相談所の業務を補完する役割を有していることから、少なくとも全国の各都道府県に最低1か所ずつは必要です。

シェルターを必要とする全国の子どもに対して大人としての責任を果たすため、国がこの事業に責任をもって取り組んでもらいたい、と社会福祉法人カリヨン子どもセンター、NPO 法人子どもセンターパオ、NPO 法人子どもセンターてんぼ、NPO 法人子どもシェルターモモの4法人の理事長の連名に

て、民主党幹事長をつうじて、下記陳情を行うため、厚生労働副大臣 細川律夫氏(現厚生労働大臣)に面会しました。



### 子どものシェルターの公的制度化を求める陳情

- ① 児童福祉法を改正して、「子どものシェルター」を公的な制度として位置付けてください。
- ② 「子どものシェルター」を各都道府県に最低1か所ずつ設置する施策を推進してください。
- ③ 「子どものシェルター」運営に必要な費用を公的資金から支出してください。

残念ながら、今年度中の予算化はなりませんでしたが、こうした働きかけがいつか実を結ぶと信じ、これからも理解を求めていきます。

### (2) 2010年10月14日 シンポジウムの開催

独立行政法人福祉医療機構の主催にて、「虐待から子どもの命を守り、子どもたちに明るい未来を！」と題して、シェルター活動についてのシンポジウムが開催されました。



### 編集後記

街にクリスマスイルミネーションが輝く季節になりました。

ニュースレター20号をお届けします。

景気の先行きはいまだ不透明で、雇用情勢も不安定な中、弱者へ施策は後退し、事業仕分けの掛け声に押されて「福祉・教育関係」予算の削減も行われております。

そんな中で子どもたちの抱える問題はますます困難さを深めております。

今後は、他の法人と共に安定した事業運営へ向けた経済基盤確立のためのソーシャルアクションを起こしてまいります。

皆様には、今後も変わらぬご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。(T.Y.)

明治学院大学松原康雄教授の基調講演につき、カリヨン、てんぼ、パオ、モモの4シェルターがそれぞれの活動状況を持ち寄り、シェルターの現状と課題についてパネルディスカッションを行いました。

弁護士やスタッフと子どもの心の交流、子どもの心身の傷の深さ、自立の困難さが報告されました。子どものケアや支援方法をさらに拡充していくために、例えばカリヨンが行うデイケア事情(カリヨンハウス)、パオが計画しているステップハウスなど、それぞれの法人で工夫をこらしていますが、抱える最大の課題は財政不足です。「社会的にシェルター活動が認められ、運営についてではなく、子どもの支援に集中できるようにしたい」各法人からあがった切実な思いです。

### (3) 2010年11月1日 PMJホープチェスト展開

フィリップモリスジャパン(株)の子ども支援制度「PMJホープチェスト」の対象が、全国の自立援助ホームとシェルターの子どもたちに拡大されました。子どもの自活生活の開始、就学、資格取得、シェルターから自立援助ホームへの転居に際し、支援金を支給するプロジェクトです。カリヨンは、事務局として協力することになりました。

### 「 News Carillon 」

本誌は、社会福祉法人カリヨン子どもセンター事務局が責任を持って編集、発行しています。(無断転載はご遠慮ください)

本誌に関するご意見、ご要望、取り上げてほしい情報などがありましたら下記までご連絡ください。

社会福祉法人カリヨン子どもセンター 事務局

〒112-0014

文京区関口 2-4-6 関口ヴィレッジ B-2

TEL 03-5981-5581 Fax 03-5981-5582

e-mail: carillon@r2.dion.ne.jp

<http://www.carillon-cc.org/>

No.20 2010年12月5日発行